

---

# Valth Mind ~二つの魔石~

朔野 類

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Va1t h M i n d s ～一つの魔石～

### 【NZコード】

N6952Y

### 【作者名】

朔野類

### 【あらすじ】

人がヴァルスと呼ばれる第六感潜在能力を使えるようになった新時代。

とある国に一人の少女が現れることで、平凡な少年の運命が大きく変わり始める。

まだまだ未熟な作品ですのであしからず…（泣）

?・少年、少女。（前書き）

“永遠に争いのない平和な世界”

人類が望んできた平和な世界は、最も身近で最も遠い。  
何故なら人は、同じことを繰り返してしまう愚かな生き物であり  
まるで小さな子供のように、欲しい物は欲しいとその欲望から手を  
離すことが出来ないから。

## ?・少年、少女。

その昔、遙か空の彼方にある天上界から地上を見下ろす三人の神がいた。

何百年、何千年もの間同じような争いを繰り返す人間を見て、神はたいそう暇を持て余し

退屈しのぎにと、人間に特別な力を与える事にした。

その力は“ヴァルス”と呼ばれ、神の持つトランジショニック（遺伝子組み換え）の能力を応用する事で人間の第六感潜在能力を極限まで引き出すことが可能になる。個人によって使える能力は様々だが、大きく二種類のタイプに分かれた。

一つは『ギフテッド』。

身体的潜在能力が高く、主に自身の闘争本能を具現化できる攻撃型スキルを持つ者。

そしてもう一つは『タレンテッド』。

知能・技能の潜在能力が高く、主に素粒子理論の基礎方程式（物理法則）を脳内で組み合わせる事により

あらゆる物質構造を変化させる事が出来る、転化型スキルを持つ者。

その力を人間がどのように使うのか。

これから起こる事を楽しみに、三人の神は地上界を見つめた。

\* \* \*

時は流れ、ヴァルスを使う者で溢れかえった新時代。

十年前までは各国の勢力争いが絶えなかつた地上界も一つの巨大国家により終焉を迎えた。

いつしか穏やかな時間が流れるようになつた国々のひとつにヘヴンと呼ばれる、広大な海と豊かな自然に囲まれた国が存在した。

レンガ造りの建物が並び、街中には音楽が溢れ、明るい雰囲気が漂うヘヴンは

その名の通り、最も楽園に近い国だと言われている。

夏の茹だるような暑さが人々を包む頃、険しい顔をした一人の少年が街中を全速力で走り抜けた。

「ゴーチェじこさまーーー！」

「どうしたんだ? リク。そんなに慌てて……」

「森…っ! 森で、お、女の子がっ!」

息が上がり、上手く話すことができないリク。

ゴーチェと呼ばれる老人はその背中を優しく撫でた。

「女の子? まさか、告白でもされたのかい?」  
「ちが…っ!」

リクは一度大きく深呼吸をして息を整えた。  
それと同時に、綺麗な銀色の髪が揺れる。

「森で傷だらけの女の子が倒れてるんだ! 早くこっちきてー!」

「なんだって？それは本當か！？」

「それじゃあ救護隊を…」

「そんなの待つてらんないよ！女の子が死んじゃう…」

リクは「一チユの手を掴むと、すぐ側に広がる森へ連れ出した。しばらくすると、大きな樹で身を隠すように傷だらけになつた少女がぐつたりと倒れていた。

「これは…っ、

大丈夫かねお嬢さん。」

頬を軽く頬をたたいてみたが返事はない

「・・・・・・

「じいさま、この子死んじゃつたの？」

「いいや、氣を失つているだけだ。でも出血がひどい…。

リク、この子を急いで家まで運ぶから手伝ってくれるかい？」

「まかせて！」

少女を背負つよにして立ち上がると、その後ろからリクが支える  
ようにしてその場を離れた。

二人は汗だくになりながら家に着くと、傷が痛まないよう静かにベ  
ットへ少女を下ろす

「リク、あっちから綺麗なタオルと水を持ってきてくれるか？」

「わかった。あ！あと、俺の服も持つてくるよ。」

「その子の服すごく破れちゃつてゐる」

「ありがとう、頼んだよ。」

リクはにっこり頷くと別の部屋へ向かった

「少し痛むかもしねないが、我慢しておくれ」

倒れてからかなり時間が経っていたのか、少女の顔がどんどん青ざめていく。

ゴーチェは少女の体の上に両手をかざすと、ゆっくり目を閉じ意識を集中させた。

「…ヴァルス！」

その言葉と同時に開かれたゴーチェの右目は先程までの焦げ茶色ではなく、赤く神秘的な色へと変化している。しばらくの間少女の体をまばゆい光が包み込むと、傷だらけだった体はきれいに治っていた。

「これでとりあえずは大丈夫じゃな。

しかし、この子はどうしてこんな傷を…」

しばらく考え込んでいると、勢いよく扉が開いた。

「じいさま、持ってきたよ。」

「すまないね。リクの服はその子の横へ置いておいてくれるか

「こひでいい？」

「ああ。」

「それじゃ後は俺がこの子を見るから、じこわまはゆっくつしてて。ヴァルス使ったんでしょ？」

すやすやと眠る少女を横目で少し見ると、リクは不安そうに眉を下げた。

ヴァルスは使うと同時に体力の消耗も激しく、老体のゴーチュにはかなりの負担が掛かってしまう。

「ふふ、私は大丈夫だよ。それにたくさん走ったんだ、お腹すいてるだろう？」「じいさまはこの通り元気だ。

食事の用意をしてくるから、出来上がった時にまた声をかけるよ」「じいさま…。」「リク、じいさまはこの通り元気だ。

それにこの子が田を覚ました時、そんな顔をしていたら不安になつてしまつだらう…」「そう…だね。

「でも！無理は絶対にだめだよ。」

「わかつている。それじゃあまた後でな。」

扉が閉まるとい、持つてきたタオルを水に濡らし少女の額へそつと乗せると

リクは少女の顔をじっと見つめた。

肌は透き通るように白く、艶のある黒い髪は、窓から差し込む光に反射してキラキラと光っている。

「早く元気になつてね。」

そう言つて小さく笑つて見せた。

\*\*\*\*\*

太陽が傾き始め、街全体が夕焼けに包まれる頃  
眠っていた少女の目がゆっくりと開いた。

「…ん。」

「おや、気がついたかい？」

「ここは…」

「私の家だよ。君は…」

少女は、はっと田を見開くと同時にゴーチュのすぐ後ろへ回り込んだ。

「お前、私を追ってきたカターニアか！？」

両手は真っ赤に光り、手首から先が剣の形へと変化している。  
瞳からは殺氣が満ち溢れ、ゴーチュの首を今にも切り裂こうとしていた。

「いいや、私達はここへヴンに住んでいる者だよ。」

突きつけられた剣に一切動じる事なく、ゴーチュは優しい口調で話かけた

「ヘヴン？じゃあ、敵じゃ……ない？」

「もちろんだ。

さつきそこにいるリクが、森の中で倒れていた君を見つけて、私に知らせてきたんだ。」

ソファーで眠るリクの姿を見つけると、少女は剣を下ろした。そして真っ赤だった瞳も、手も、本来の姿へ戻っている。

「ごめんなさい、私……」

「気にしなくてもいいさ。誰だって、突然知らない所にいれば怖くなる。

「そうだ、お腹減ってるだろ？」「…」

「いいえ…。」

ゴーチェがにつこつ微笑むと、少女のお腹からは勢いよく腹の虫が泣き出した

「あつ……。」

「ふふ、すぐに持つてくるから安静にしていなさい。」

恥ずかしそうにお腹を押さえる少女に微笑みかけるとソファーで眠るリクの頭をそっと撫でた

「それから、食事を持って来る間にその服に着替えるといい。リクが君に用意した物だ。」

「この子が、私に？」

「ああ。君のことをとにかく心配していたよ。

さすがに、汗だくで私の所へ走ってきた時は何事かビックリしたがね。」

「そこまでして、どこの誰かも分からない私を…」

琥珀色の瞳が、真っ直ぐにリクへと向けられる。

「まあ、今日出会ったのも何かの縁だ。

もし行く当てがないのならしばらくここに居るといい。

見たところ、リクと君は同じくらいの年頃だからあの子も喜ぶだらうし、

少なくともこの街にはカーターニアや他の国からは誰も来ない。」

「でもそんなの迷惑なんじゃ……」

「そんな事ないさ。この家に孫が一人増えたみたいで、私も嬉しいしね。

だから、少し考えてみておくれ。」

優しい笑みを浮かべて少女の頭を撫ると、そつと部屋を後にした。

夕日が沈み、いつの間にか辺りはすっかり暗くなっている。  
少女は置いてあつた服に着替えるとベットを抜け出し、ソファーで眠るリクの横顔をじっと見つめた。

「助けてくれてありがとう。」

着替えた服にそっと手を当てて、静かにベットへ寝転んだ。

\* \* \* \* \*

しばらくすると、食事を持ったゴーチュが戻ってきた

「待たせたね。さあ、たくさんお食べ。我が家の大特製ビーフシチュー  
ーだ。」

「美味しい……。」

部屋に「ぱこ」「ビーフシチュー」のいい香りが広がる。  
その香りにつられての香りにして、寝ていたリクが皿を覚ました

「んー…。じこれま」はんできたの…？」

「おはようソク。さあ、じつにきてお前も食べなさい。」

「うん……。

「ってーこの子起きたのー? てゆうか、こいつの間に寝ちゃったのー? 俺が見てるって言ひたのに…」「めんなさい。」

「はははは。怒つてなんかいないわ。」

すっかり落ち込んでしまったリクを慰めながら、テーブルへと座らせた。

その様子を見て驚いた少女に、「ゴーチュはじつと笑つてみせる

「君、もう大丈夫なの? どこか痛いといひはない?」

「えつと…大丈夫。それよりも、助けてくれてありがとう。」

「そ、そんなのいいよ! だつてケガを治したのは俺じゃなくてじいさまなんだから。」

顔を真っ赤にしたリクは照れくさそうに頭を掻いている

「そうだ、まだ名前を言つていなかつたね。私はゴーチュ・アルジ  
ヤー。」

そしてこの子が…」

「リク・アルジャーノ！ よろしくね。」

そう言って差し出された手を、恐る恐る握り返した。

「私はラシエル。

ラシエル・レオカティア。こちらこそ、よろしくね。」

「そつか！ ラシエルってやうんだ。でも、どうしてラシエルはあんなところで倒れてたの？」

「それは…。」

「リク。その話は、また後にしてあげよう。早く食べないとビーフシチューが冷めてしまつよ？」

「はあーい。」

しょんぼりしてくるリクを尻目に、ラシエルは俯いてしまった

「ラシエル、まずは体を元気にするのが先だ」

「『一チ』さん…。」

「ははっ、『一チ』で構わんよ。わあ、たくさんお食べ

「…ありがと。」

それからじばらぐすると、大きな鍋に入つた大量のビーフシチューは育ち盛りの子供達があつと/orに平らげた。

「あーお腹いっぱい！ ねえじいさま、ラシエルにこの家の中案内してきてもいい？」

「傷は治つてもまだ体力が戻つてないんだ、また明日にしてあげなさい。」

それよりも、いい子はそろそろ寝る時間だ。」

「…はあー。

ラシヨルー明日は俺が家の中ひやんと案内するからねー。」

「それじゃあ、また明日。」

ベットにもたれかかっているラシヨルに、リクは無邪気な笑顔を見せると

ゴーチュと共に部屋を後にした。

「…本当に、ありがとウ…。」

目を閉じると、一人の出て行つた扉の方へ深く頭を下げた。  
そして、襲い来る睡魔はラシヨルを夢の中へと誘つていく。  
美しい琥珀色の瞳は、瞼にゆっくりと包み込まれていった

。

## ?・それぞれの思惑

その頃、ヘヴンから一つの国を挾んだカターニア。

十年前の戦争を終わらせた巨大国家であり、経済や医療など様々な分野における先進国もある。

カターニアには毎年各国から若い少年少女が集まり、優秀なヴァルス使いになるための知識や訓練を学ぶ

セブンズ・インスペイア総合学院が中心に大きく聳え立つてゐる。

そして今、その学院地下にある研究施設では、物々しい雰囲気が漂っていた。

「おい！ラシェルはどこに行つたかまだ分からぬのか！？」

「も、申し訳ありませんダレル様。しかし、あの傷ではそう遠くへは行けないはずです。

あと2日もあれば必ず……！」

「どんな方法でも構わない。私の前にラシェルを連れて來い。」

電子機器や実験道具が所狭しと並ぶ室内では  
ダレルと呼ばれる眼帯をつけた黒い長髪の男が不機嫌な顔をして立  
つてゐる。

「りよつ、了解しました！  
し、失礼いたします！！」

部屋に居たもう一人の男は慌ててその場を後にした。

「ラシェル…隠れんぼはそろそろお終いだ。

さつさとグスクを渡していれば、私の犬にしてあげたものを…。」

壁に貼つてあつたラシェルの写真を手に取ると、何度も何度も切り刻み

ダレルはその部屋を後にした。

『グスク』とは、強大なヴァルスを秘めた二つの魔石の事で、それぞれに天使の碧い瞳と悪魔の赤い瞳が埋め込まれている。

元々は天上界にあつた物を、好奇心旺盛な一人の神が地上界へ持ち出し、カターニア近郊の空から投げ捨てた。

そして偶然にも、空から降る魔石を目撃したのが当時、ヴァルスの力の解明をしていた研究者の一人で、レオカディア家の当主ブリリアント。

カターニアでも優秀な若き研究者と名高かつたブリリアントは、その二つの奇妙な魔石を家に持ち帰り、密かに一人で研究を続けていた。

そして研究を始めて十五年が経つたある日の午後、ブリリアントはついにグスクの正体を知った。

「これは…っ！」

「何故、こんな物が空から……。」

膨大な量の研究データと結果を目の前に、ただ頭を抱えるしか無かつた。

天使の瞳が入ったグスクには“叫喚地獄”と言われる活殺自在の力。そして悪魔の瞳には“悪鬼羅刹”的封印されし魔物の力。

この二つの魔石を同時に使う事で、神に等しい力が手に入る。

しかしその二つの力を使えば、永遠に等しい苦しみを受け続け、精神を崩壊させると別の生き物へ変化させてしまうという。

「私の手で壊すしかない。」

真面目だったブリリアントは、タレンティッドである自らのヴァルスを使い、魔石の破壊を試みる。

しかし、いくら術式をえても魔石に傷一つ入ることは無かつた。どこかに捨ててしまふ訳にもいかず、特殊な鉱石を加工して作ったブラックボックスに魔石を封印する事にした。

「勢力争いが終わつたばかりだと言うのに、こんな物が世に知られれば、また無駄な争いが起こつてしまつ。」

それだけは何としてでも避けなければ…。」

そして今度は魔石を破壊するための研究に没頭していくのだった。

\* \* \* \* \*

所変わつて学院内では、盛大な感謝祭が行われていた。

勢力戦争終結の翌年に開校されたセブンズインスパイアは現在カタ

一一アの治安維持にも貢献しており、  
選りすぐりの、ヴァルス使いを集めた能力集団『ゼウス』によつて国  
内外の不穏分子を排除している。

学院の運営には、カターニアに住む人々からの支援によつて成り立  
つてゐると言われ  
年に一度、夏の時期に学院の大きな正門を開き、街の人々を学院内  
へ招待している。

そしてその感謝祭は五日間に渡つて行われ、國中がかつてないほど  
の熱氣に包まれるという。

そんな楽しげな雰囲気が漂う学院内を、避けるように歩く一人の男  
の姿があつた。

「ダレル様……！」

巨大な石の柱が続く廊下を、美しい金色の髪を靡かせて走る女性は、  
歩いていた男の腕を掴んだ。

「どうしたレイラ。何かあつたのか？」

「何かあつたではございません！ わたくしはずつとダレル様を探し  
ていましたのよ！」

「一緒に、お茶でもいかがですか？」

「すまないが今はそういう気分じゃないんだ。

また今度に……」

「ダーメ！ ですわ。さ、じつちへ。」

半ば強引に、ダレルの腕を引っ張ると、色とりどりの花に囲まれた庭  
園のティールームへ連れて行つた。

「…。」

「何か考え方ですか？」

「ん？あ、いや、そう言つ訳ではないが。」

「近頃学院内でダレル様のお姿を拝見していなかつたので、わたくしはとても寂しかつたです。」

綺麗な緑色の瞳がダレルを真つ直ぐに見つめた。

「所用で少し離れていてね。  
ゼウスの皆は元氣かい？」

「もちろんですわ。」

そうそつ、ダレル様がいらつしゃらない間、学院長様がわたくし達に能力指導をして下さつて。」「学院長様が自ら…？」

「ええ。何でも近日中にゼウスの皆を集めて能力の強化を行ひそゝですわ。」「どう言つ事だ。私は何も…。」

そう言つて少し間があいた後

ダレルは急に立ち上がると、庭園を駆け足で後にした。

「ダレル様？どこに行くのですか！」

一人残されたレイラは、こいつそりとその後を追いかけた。

バタン 。。

学院長室の扉が勢いよく開くと共に、不機嫌そうな顔をしたダレルが姿を現した。

「フロイス様。少しお伺いしたい事があります。」

目の前には体格の良い黒い髪を生やした男ががぞっしりと椅子に腰掛けている

「ダレルか。何用だ。」

「ゼウスの能力を強化するとは、どういう事でしょう。」

私はそのような話を一切聞いておりませんが。」

「君に話す必要などない。我がそう判断したのだ。」

「一体何故です！ゼウスは私が作り上げたものですよ？」

「君はあの日、我と契約を交わしたではないか。」

妹のラシェルを探し、グスクを奪うために私の右腕となり、駒になると。

違つかね？」

「そう、ですが…」

「ゼウスを作り、育てたのも君だ。」

しかし甘いんだよ、何もかもが。」

フロイスは髪を撫でながらダレルを見下した。

「仰りたいことは分かりました。ですが、能力の強化については私も同席させていただきます。」

「いいだろう。だが君は先日、みづやく見つけたラシェルを逃がしたそうじゃないか。」

「それは…」

「ダレル。そんな事ではラシェルを殺すこと、グスクを奪うこともできんぞ？」

「…くつ。」

「悔しいなら君も能力の強化を受けるといい。

われが新しく開発した内蔵型チップ“IF206”を使えば、心

身共に極限までヴァルスを引き出す事ができる。

そして体力の消耗も今までの1／2にまで抑えられるんだ。」

「どうだい？ 素晴らしいだろう？」

「…確かに興味深いですが、そのIF206を埋め込む事で身体に影響はないのでしょうか。」

「今まで動物を使っての実験だったからね。人にどう影響が出るかはまだ分からぬ。」

「そんな…！」

それではゼウスの者達を実験体になるとおっしゃるのですか！？」

怒りのあまり、ダレルの目が赤く血走っている。

「技術の発展には何事も犠牲が必要だ。」

「フロイス様…。そのIF206に関して、私が実験体になります。ですからゼウスの者には手を出さないでいただきたい。」

「おやおや、優秀な学院長補佐である君ともあろう人間が、ゼウス<sup>1</sup>ときたく情でも湧いたか？」

「いえ…そう言う訳ではありません。

私の道具に、勝手に触られるのが嫌なだけです。」

「ふふ、いいだろう。ならばその条件、飲んでやる。」

「…ありがとうございます。」

方膝をつき、頭を下げるトフロイスは満足そうに笑みを浮かべた。

「…ダル様…つ。」

学院長室から少し離れた部屋の一角で遠聴覚と呼ばれる諜報能力を使い、レイラは複雑な表情で二人の会話を聞いていた。

「それでは明日の午後、第二研究室でまた会おう。  
「かしこまりました。それでは、失礼いたします。」

丁寧に一礼をすると、ダルはその部屋を後にした。

「奴を実験体にしてもよかつたの？」

「今まで自由にさせすぎた。我にはもう必要のない駒だ。  
手を加えれば、少なくとも今よりは使い物になるであろう。」

「フロイスつてば…まったく酷い考え方だね。

自分が拾ってきた物なんだから大事にしてあげないと。」

窓際で話を一部始終聞いていた少年がにっこりと笑う。

「さあ、もうすぐ全ての準備が整うんだ。

お前も最後の調整を始めなければいけないな、ジーー。」

「わかつてるよ、フロイス。

でもその前に…今はせつかくだから、感謝祭でも楽しんでくるよ

！」

「まつたく。」

「僕の事は大事にしてよね、フロイス。」

そういうて無邪気に笑うと、人で賑わう学院の中心へ走つていった。

\*\*\*\*\*

「ダレル様…！」

「つ、レイラ。まだ居たのか。お前は皆の所へそろそろ…」

「戻りませんわ…！」

ダレルが一人噴水を眺めていると、後ろからレイラが抱きついた。

「おひつ…！」

「わたくしはダレル様を実験体になどさせません。」

「お前、さつきの話を…」

「聞いてしまいました。申し訳ございません。」

「…。」

「ですが、わたくし達のためにダレル様が苦しむなど…耐えられません！」

「何か勘違いをしているようだから言つておく。

私は君達ゼウスを助けた訳ではない。

自分の道具を、他人に触れられたくないだけだ。」

抱きついていたレイラを強引に引き剥がすと、その場から離れていく

「わたくしは諦めません！例えダレル様が望んで実験体にならうとしても

絶対に阻止してみせます！」

どんどん小さくなつていいくダレルの後姿を  
胸に秘めた決意と共に、ただじつと見つめていた

。

## ?・記憶の扉を（前）

。。。。

一日の始まりを告げる、大音量の日覚ましが部屋に響き渡った。

「んー…じいさま、もつ食べれない…。」

「こりクリク。こつまで寝てるんだ、早く起きなさい。」

「うー……。」

カーテンを開けると、まだ薄らと暗い太陽の光りが窓から差し込む。

「早くしないと、朝ごはんが冷めてしまつぞ~。」

「…」  
「飯つーー！」

リクはその三文字につられて、ベットから飛び起きた。  
リビングからは美味しそうな匂いが伝わってくる。

「おはようじいさま。ラシユルはまだ寝てる?」

「いいや、私よりも早く起きて外に居るよ。」

「ほんとに?じゃあ俺、見に行つてくる!」

「ああ、それなら今日は天気もいいし朝ご飯は外で食べようか。  
後で持っていくからラシユルにも伝えておいておくれ。」

「わかった!」

急いで服を着替えると、勢いよく家を飛び出した。  
ゴーチュの家は街から少し離れた所にあるため、すぐ側には緑が広  
がっている。

すると、汗だくになりながら何かをしてこむラシエルが田に飛び込んできた。

「ラシエルー！」

「あ…おはようワク。」

「何してたの？」こんな朝早くに…」

そう言しながらラシエルの右手を見て、鳥を呑んだ。

「あ、それは…」

包帯の巻かれた手首から先が剣の形に変化している。

「」の能力やっぱり、おかしい…？」

「おかしいと言つか…ギフトでなら具現化は出来るけど、体の一部を変化させるなんて無理、だよね…？」

「その通り。」

「じいさまーいつの間に…」

「ついせつきたよ。私も昨日見て不思議だつたんだが…やはり見間違いでは無いようだね。」

「昨日見たの！？」

「さうだが、それよりもラシエル。体はもう平氣なのかい？」

「うそ…」

ゆつくりと頷いてみせる。

だがその顔は依然として曇つたままだった。

「あ、あのさ！昨日からずっと考えてたんだけど、もし俺に何か出来ることがあれば言ってほしい！」

だつてあんな傷を負わされるなんて、普通じゃ考えられないと思  
うんだ…。」

「リク…。」

「そりだよラシェル、私達は君の味方だ。」

二人の言葉を聞き、ラシェルの目に一筋の光りが灯ったような気が  
した。

「でもこれ以上私に関わると、一人の身に危険が及ぶかもしれない  
…」

「そんなの平気だよ。俺は、ラシェルの力になりたい…守つてあげ  
たいんだ！」

リクは真剣な表情で見つめると、ラシェルの手をぎゅっと握りしめ  
た。

隣にいたゴーチェも優しく微笑んでいる。

「ありがとう…。」

ここに来て初めて、ラシェルは小さく微笑んだ。

目を閉じ、深く深呼吸すると今までの出来事を静かに語り始めた。

時を遡ること5年前 - 。

当時10歳になつたばかりのラシェルは、いつものよつて兄のダレ  
ルと庭でヴァルスを使う練習を行つていた。

「「ガアルス！！」」

互いのギフトエッジの能力で剣を創造し、目の前に置かれた二つの木の的へ一斉に飛び掛かる。

「はああああっ！」

「てやーっ！」

すると見事に的是真っ二つに分かれた。  
だがラシェルは不機嫌そうな顔をしている。

「やつぱり私、お兄様みたいに上手に出来ない。」

ダレルの剣はしっかりと形を保つたままだが、ラシェルの剣は今にも消えてしまいそうなほど弱々しい形をしていた。

「そんな事ないさ。昨日より剣の形は綺麗に出来るじゃないか。」

「でも…」

「指先まで感覚を研ぎ澄ませるんだ。」

それを意識すれば、もつと上手くこなすだ。」

「もう一度やってみる…」

「そうだね…ああ、そうだ！森に丁度良い大きさの木の枝があつたから、それを使って形のイメージを整えてみるといい。  
すぐ取つて来るから、ちょっと待つて。」

にっこり笑うとダレルは家のすぐ側に広がる森の中へ姿を消した。  
降り注ぐ太陽の光を感じながらラシェルは意識を集中させる。  
だが突然、はっと目を開けた。

「お父様…？」

少し離れた玄関から扉の閉まる音が聞こえると、ラシールは慌てて家中へ入つていく。  
しかし、田の前の広間に誰の姿も無かつた。

「あれ…？絶対そうだと思ったのに。」

ラシールは微かに番る父の匂いを追つて、広い家の中を歩き回る。  
そして気がつくと普段は入ることのない地下室の扉の前に辿り着いた。

「おとうさま？帰つてるの？」

「…。」

呼びかけに反応はなく、恐る恐る扉を開けるとそこには食事に入るようパソコンの画面を見つめる父の姿があつた。

「お父様っ！やつぱり帰つてたのね！」

「…つら、り、ラシール！？何でこんな所にお前が…」

「匂いを追つてここまで来たの！帰つてるなら言つてよねつ。」

そう言って抱きつくと、久しぶりに伝わる温もりがラシールを包んだ。

研究者だった父は家を空けることが多い、長ければ一週間程度戻らないこともあった。

「寂しい思いをさせてしまつたね。

だけどここには入つちゃ駄目だとママから言わなかつたか？」

「言われたけど、でも…」

「でもじゃない。」ここはパパの大事な仕事部屋なんだ。それに危ない物だつてたくさんある。

また後で一緒に遊ぶから、今はママの所…

「いやっ！お父様から離れたくなーい！」

「ラシユル…。仕方ないな、少ししたら上に行くんだよ？」

「うんっ！」

やれやれと言つた表情で冷蔵庫へ向かう父の姿をよそに、ラシユル

は嬉しそうに後を着いていく。

すると机の上に置いてあつた綺麗な箱を見て、ラシユルの動きが止  
まつた。

「ねえお父様、その綺麗な箱には何が入つてるの？」

引き寄せられるよつに手を伸ばした瞬間、大きな手が視界を遮つた。

「それは駄目だ。」

「どうして？すいべく綺麗なのに…」

手の届かない場所へ箱が遠のくと、大きく頬を膨らませた。

「あれは本当に危ない物なんだ。いい子だから分かつてくれるね？」

「はあ…」

「ほら、お前の好きなオレンジジュースだ。」

「わあ…！ありがとうお父様！」

くぬぐると表情を変えるラシユルに、父も思わず微笑んでしまつ。

「あーでもね。さつきあの箱の中から声が聞こえたよ？」

だがそのひと言で、室内の空気が一変した。

「声…？それは本當か！？」

「え、うん…。なんかね、女人の人の声が私に話しかけてくるみたいに“助けて”つて。」

「他には何か聞こえなかつたか！？」

「後は何も…。でもね、なんだか懐かしい感じがしたの！」

暖かくて、前にも聞いたことがあるような…。」

「懐かしい？」

しばりく考え込んでいると、急にパソコンへ向かい何かを調べ始める。

そしてラシエルが父の顔を覗き込むと同時に、椅子からはつと立ちあがつた。

「…」

「お、お父様…？」

「あのグスクに付着していたのは皮膚だつたのか…。

だとしてもあの時、細胞などどこにも…。」

一人で何かを呟きながら、側に置いてあつた分厚い本を熱心に読んでいる。

もう片方の手で器用に文字を書き綴つていくとしばりくその場に座りこんでしまつた。

残されたラシエルはまた大きく頬を膨らませながら、先程の綺麗な箱を見つめている。

「ほんとにすばらしく綺麗…。ママにあげればきっと喜ぶの！」

届かないと解りつつ手を伸ばそうとしている、作業を終えた父に

突然後ろから抱きしめられた。

「ラシエル！お前のおかげだ！」

「ぐぬしこよお父様……！」

「す、すまない。でもさつきの言葉で研究が少し進んだんだよ。あ  
りがとうラシエル。」

「お父様のお役に立てたなりすく嬉しいけど、ここにできつと何の  
研究をしてるの？」

「それは……」

魔石について話をした瞬間、上方から誰かの悲鳴が聞こえた。

「今のは……ラシエル、お前は少しここに居なさい。」

「え！？お父様！？」

「動くんじやないぞ！」

ラシエルの言葉を聞く前に、父は勢いよく部屋を後にした。  
階段を駆け上がり広間へ辿り着くと、そこには信じがたい光景が目  
に飛び込んできた。

「そんな……。ネフイー！！！」

「ブリリアント…早く、逃げ、て…。」

「しつかりしろ…頼む、目を開けてくれ…。」

大量の血を流しながら倒れていたのはブリリアントの妻であるネフ  
ィーだった。

急いでヴァルスの力を使い傷口を塞いだものの、出血がひどくその  
言葉を最後に息を引き取った。

「ネ、フイー…。」

突然の出来事に何が起きたのか理解できずにはいると、背後から声が聞こえた。

「やあ、ブリリアント。元気にしてたかい？」

「フロイス…？ 何故お前がここに…。」

振り返った先に居たのは、研究所で働く同じチームのフロイスであり、血の着いた白衣が状況を物語っていた。

「どうして…お前が私の妻を…。

「… 答える…！ フロイス…！」

殺氣に満ちた右目は真っ赤に染まり、禍々しいオーラを纏っていた。しかしフロイスは微動だにせず、ただ不気味な笑みを浮かべている。

「まあまあ、そんなに怖い顔をしないでくれ。

今日は君の隠している物を、受け取りに来たんだよ。」

「隠している物…だと？」

「グスク。そう言えば理解してもらえるかな？」

「何故それを…！」

極秘に研究していたはずの魔石の存在を口にした事に驚きを隠せない。

「随分と前から研究所での君はどこかおかしかった。

だから私は直属の部下に、君の行動を監視させるよう命じた。」

するとどうだ？ 人気の少ない夜間に、書庫で魔石や天上界に関する資料を読み漁っていたり

研究データの一部を自宅に持ち帰つたりと…。

「眞面目な君の事だ、面白い研究材料を見つけたんだらつとすぐ分かつたよ。」

フロイスは手の平で小さな石を遊ばせながら話を続ける。

「そしてつい先日、君が見た事も無い魔石の研究をしていると報告が入つてね。

「グスクとは…さぞかし貴重なものなんだろう?悪いことは言わぬ、我に渡せ。」

「…そんな物、ここにあつたとしてもお前に渡すわけがない。」

「おやおや、随分と嫌われたものだな。」

「当然だ。研究者と言う立場を利用して、様々な魔石を体内に同化させれる実験を行つていた…それを私は知つている。」

「ほう。それに気がついていたとはさすがだな、ブリリアント。だが…もう遅い。

「我の計画はすでに始まつてゐるんだよ。」

「お前は一体、何を…」

「無駄なお喋りはこれで終わりだ。渡す気がないなら、力ずくで奪わせてもらひつとしょ!」

フロイスは持つていた石を捨てるに、ゆっくりと近づいてくる。ネフィーを静かに下ろすと、ブリリアントは両手を床につけた。

「絶対に渡さない。フロイス、お前にはいいじで…死んでもいい!」

「ネグレクト・オーラルテイク!…!」

その言葉と同時に床の表面が割れると、砕けた石が鋭い針のよいつぶつわり空中へ散らばつっていく。

そしてフロイスへ何千もの欠片が真っ直ぐに降り注いだ。

「いやかしい真似を…アビリティ、ゾロコンバット。」

透明な膜がフロイスを包むと、飛んできた破片はあつとこつ間に全て粉々になってしまった。

そしてブリリアントと同じく右目は赤く光り、手には先が奇妙に曲がった両剣が握られている。

「そんな物、もはや我には通用せんぞ？」

「くつ…」

じりじりと間を詰められ、気がつくと地下室へ続く階段の扉がすぐ後ろに迫っていた。

ブリリアントはポケットから小型ナイフを取り出すと、迷うことなく自らの左手に刺した。

溢れ出る血が辺りを赤く染め上げている。

「はははっ、ついに血迷ったかブリリアント。ならばこれで終わりにしてやるつ…」

「…」

「死ね！ブリリアント…」

フロイスの両剣が怪しく炎を纏うと、依然下を向いたまま動かないブリリアントへ走り出した。

すると突然顔を上げたブリリアントは、目に見えない速さでフロイスの後ろへ回り込むと右手を思い切り振り下ろした。

その手には、先程のナイフが赤黒い色をした鋭い鎌へ変化し、しつかりと握られている。

咄嗟に避けたフロイスだったが、完全に避けきる事は出来ず肩に傷

を負つた。

「グスクの存在を知つたお前を、生かして返す訳にはいかない……」

「つ。小癩なまねを……」

ヴァルスで物質を変化させる前に、意図的に自らの血液を含ませる事で、タレンテッドの能力でのみ物質と共に自身の体内の構造をも組み変える事が出来る。

しかし体内のあらゆる細胞を無理に変化をせしめつため、一時的な効果を終えると死に至つてしまつ。

その危険な能力を独自に発見したのはブリリアントだった。

「……ぐあつっ……！」

攻撃の隙を突かれ体勢を崩したブリリアントの腹部を、フロイスの剣が真っ直ぐに貫いた。

苦痛に耐えながらも広間の壁を壊し、防御壁に造り変えると下へ続く階段を一気に駆け下りる。

そしてすぐさまその階段を先程と同じように防御壁へ造り変え道を塞ぐと、地下室の扉を勢いよく開けた。

「ラシユル……！」

「お父様！上で何が……ひどい怪我してる……早く手当てしないと……！」

力なく部屋を歩く父の姿を見て、状況が全く分からぬラシユルはうろたえる事しかできない。

そんなラシユルの腕を掴むと、自分の隣へ座らせた

「ラシヨル、これから話の事をよく聞いてくれ……。今からお前に、パパの…全てを預ける。

それを持つて、とにかく遠くへ逃げるんだ…つ。

「いきなり何言つてるの…? 訳がわからんないよ! 私は…」

「…今は分からなくともいい。いずれ分かる…」

「これだけは、決して誰にも渡してはいけないんだ。」

ブリリアントは一冊の本と箱に入れていた二つのグスクを取り出した。

「それってさつきの…。」

「これはグスクと言つて、強力な力を秘めた魔石だ。そしてその本には、魔石に関する分かつた事を全て記録してある…。」

「どうして私にそんな物…!」

「声が聞こえたお前なら…きっと、これを…」

そつ言いかけた瞬間、上から大きな爆発音が聞こえた。

「もつ…どつちも時間がないか…。」

「時間がないつてどう言つ事! ? なんにもわからんないよ! 説明してお父様…つ!」

「…今上には、その魔石を狙つて来た奴等がいる。」

「そんな…!」

「防御壁を作つてあるが、もう持たない…。  
だからお前に、そのグスクを託したい。」

ラシヨルの手を取り優しくキスをすると、持っていた鎌の先をゆつくり添えた。

「お、お父様……！？」

「すまない…ラシェル…つ…！」

その言葉と同時にラシェルの手の平を思いきり、切り裂いた。

「いやああああああああああ…………！」

「本当にすまない…つ…だが、こうするしか方法が無いんだ…！」

娘の悲痛な叫びに涙を浮かべながら、もう片方の手も切り裂く。そしてすぐに傷口へグスクを無理やり埋め込むと、ブリリアントは着ていたシャツを裂き、急いでラシェルの手に巻きつけた。

「……。」

「ラシェル、ダレルと共に生きて必ずこのグスクを…」

痛みで気を失ったラシェルを抱きかかえ、外へつながる隠し通路にそつと降ろすと地下室側の扉をヴァルスで完全に塞いでしまった。室内で一人、ブリリアントは置いてあったパソコンへ静かに手を触れる。

「フロイス…お前には、何も渡さない。」

段々と近づく足音を確認するかのようにじっと目を閉じ、耳を済ませた途端、勢いよく扉が倒れる。

すると、外の見張りをしていた数人の兵士と共にフロイスが姿を現した。

「魔石を…！」

「ジ・エンドだ、フロイス。」

ブリリアントが青ざめた顔でにっこりと微笑んだ瞬間、跡形も無く  
その一角は吹き飛んだ。

バランスを失った家は崩れるように全てを飲み込むと、広大な瓦礫  
の山へ姿を変えた。

辺り一面を静寂が包み込む 。

すると、瓦礫の中から数人の人影が浮かび上がった。

「くつ…。ブリリアントめ、無駄な事を…。」

「大丈夫ですかっ、フロイス様！」

姿を現したのは、フロイス達であった。

咄嗟にヴァルスで防御壁を形成したが間近で爆破に巻き込まれたた  
め、体のあちこちから血が流れている。

「フロイス様、すぐに傷の手当を…！」

「必要ない！それよちも…グスクはどうにある！？お前達、今すぐ  
探し出せ！」

強烈な殺氣の一言を浴びた兵士達は、負傷した体を引きずりながら  
瓦礫の山を必死に探し始める。

すると入り口のあつた付近から人影が這い出てくるのに気づき、一  
人の兵士が近づいた。

「誰だ…！？」

慌てて銃を具現化し、その銃口を人影へ向ける。

「…………お、とう、さま…。」

「お前は…。」

奴の娘だな！？グスクの在り処はどうだ！今すぐ言わないと…！」

兵士は銃口をラシェルの頭に狙いを定めた。

「グ、スク…？」

「…………」

ラシェルは突然両目を赤く変化させると、先程までとはまるで別人のような雰囲気を漂わせ、引き金に手をかけた兵士の体を真つ二つに切り裂いた。

悲鳴を聞いた他の兵士とフロイスが慌てて駆けつける。

「どうした…！！！」

「これは…。お前の仕業か、ラシェル。」

フロイスは、ただならぬ殺氣を纏つたラシェルを見ると静かに構えた。

周りに居た兵士達もそれぞれに武器を具現化している。  
そしてその場の沈黙を破ったのはラシェルだった。

「…………排除、してあげる…。」

物凄い速さでフロイス達の前まで迫ると、大きく手を振り下ろした。  
その右手は手首から先が鋭い長剣へ変化している。

「くっ…。」

「うわああああっ！」

「ふふ…はははは…！！！無様に死ね！」

変わり果てたラシェルの瞳には狂氣が宿り、フロイス達へ次々と襲い掛かかる。

瓦礫の山で激しい争いが繰り広げられる中、すぐ側の森からダレルが姿を現した。

「はあっ、はあっ…遅くなつてごめん！

ラシェル……！？」

いつもと変わらない平和な一日だったはずが、待っていたのは変わり果てた家と、武装した兵士。そして無残に散らばる死体。息の上がったダレルの手には真っ直ぐな木の棒が握られている。

「何が…あつたんだ…父様…母様は…。」

起こっている出来事を全く理解できないダレルは、ラシェルの姿を追い瓦礫の山へふらふらと歩み寄る。

いつしか日は暮れ始め、雨が降り出していた。

「フロイス様！このままでは…。」

「くつ…解つて…いる。だが今ここで引く訳には…！」

「我々が注意を引き付けておきます！その間にフロイス様はお逃げ下さい！！

行くぞお前達！！」

数人の兵士が注意を逸らすため一斉に飛び掛っていく。

その時フロイスは、ラシェルの手に巻かれた布の隙間から赤い石の

ような物が埋め込んであるのに気がついた。

眉間にシワを寄せ、その手をじっと見つめている。

「ほひ…なるほど。ブリリアントめ、娘に魔石を託したと言つ事か。  
ん？あれは…。」

目に映つたのは、力なくラシェルへ向かつて進むダレルの姿だった。フロイスは少し考え込んだ後、怪しげな表情を浮かべ再びラシェルの元へ足を進めた。

「うあああああっー！」

兵士は肩を切り裂かれ、もだえ苦しんでいる。

「良い眺め…。次は誰が相手になるの…？」  
「ラシェル！－何故戦つてゐる…！。答えてくれ…！…！」  
「…。」

背後から聞こえたダレルの声に、ゆっくりと顔を向けた。ラシェルの体は大量の血で汚れている。

それに一瞬引きついた表情を見せたダレルだが、さらに一步を踏み出す。

すると突然ラシェルは頭を抱え込んだ。

「来る…な！」

「…何があつたのか…教えて欲しい…。」

戻つて来たら家が無くなつて…父様の能力の気配も消えて…母様まで…つ。」

俯きながら話すダレルの顔は雨に濡れているせいか、泣いているよ

うにも見えた。

「お兄様つていつも引っ付いてばかりのお前が…血なんか嫌いで人を傷つけることも出来ないお前が…つ

何でこんなことになつてるんだ！！！」

「排除、しなくちゃ…。悪いものは排除…つ！」

腕を掴まれたラシェルは一瞬顔を苦しそうに歪めたが、その手を振り払うと同時にダレルへ剣を振り下ろした。

反射的に体を反らせたものの避けきる事は出来ず、顔の右側から大量の血が流れている。

倒れ込んだダレルにどごめを刺そうとラシェルは高々と腕を振り上げた。

「つ…。己の兄を手にかけようなどと、見かけによらず随分と酷い事をするのだな。」

二人の間へ割つて入つたフロイスは、ラシェルの剣を受け止めていた。

その後ろではダレルが驚いた顔をしている。

「あ、あなたは…」

「ここは危険だ。我と共に來い、そうすれば全てを教えてやるつ。」

「全て…を…。」

「あら。私はまだ…ここに居るわよ？」

「くつ…しまつた…！」

正面にいたはずのラシェルが消え、フロイスのすぐ後ろへ回り込ん

でいた。

その口元は怪しく歪んでいた。

剣の先がフロイスの背中へあと数センチと言つ瞬間、ダレルはそれよりも素早く具現化した剣でラシエルの体を貫いた。流れる血が雨に溶けて淡く滲んでいく。

「…ラシエル…。」

「お…に、いたま…。」

ゆっくりと地面に倒れていぐラシエルの瞳は元の綺麗な琥珀色に戻っていた。

先程までの狂気はどこにも感じられない。

ダレルは横たわるラシエルの側へ膝をつき、ゆっくりと顔を俯かせた。

「危ない所だつた。礼を言つよ。」

「…聞かせてくれるんですね…」ここで、何があつたのか…全部。

「もちろんだ。我に着いて来ると良い。」

そう言いながらさりげなく隣へ屈み込む。

フロイスが埋め込まれた魔石を取ろうと手を伸ばすと、ラシエルの手からバチバチと電気が走り、その大きな手を拒絶した。

「（どういつ事だ…まさか、これもブリリアントの小細工なのか?）

」

頭の中であらゆる可能性を考えていたが、行き着く答えは一つだった。

「ダレル… そろそろここを離れよう。」

「どうして、名前を…？」

「おや、覚えていないか？以前ブリリアントの研究論文の受賞パートナーで会った事があるんだがね。」

「…。」

「とにかく、今は我家へ来ると良い。そのままでは風邪を引かせてしまう。」

フロイスは一瞬ラシエルの手を見て悔しそうな顔をすると、優しくダレルを立ち上がらせた。

二人の姿が闇の中に消えていく。

その場に残されたのは無残に転がる死体と、眠るように倒れるラシンエルの姿。

大量の血を洗い流すようにいつまでも冷たい雨が降り続けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6952y/>

Valth Mind～二つの魔石～

2011年11月30日21時46分発行